



FREX RESIDENCE SEIJO MODEL

2013年、ヘーベルハウスの最新形。

「FREX RESIDENCE 成城モデル」の、開口部が最大幅11.8m、高さ3.4mのリビング。ダイニングとリビングは、(ミューラー邸)のよう。ラウムプランによって、各空間に設計する空間に開放感がある大空間を実現。

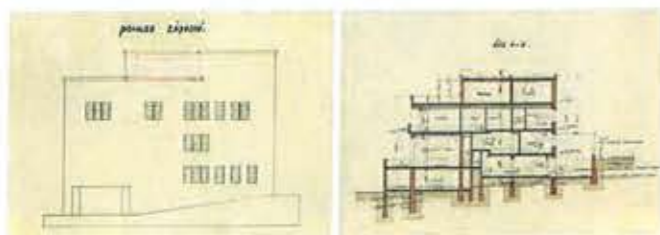


1 FREX RESIDENCE SEIJO MODEL ≡ VILLA MÜLLER

VILLA MÜLLER

1930年、ラウムプランの集大成。

立体で生活空間を捉える。ロースのラウムプラン集大成は1930年に完成した「ミュラー邸」です。壁ではなく部屋ごとのレベル差で空間を視覚的に仕切るラウムプランは、変化に富んだビスタを室内に作り出します。



アドルフ・ロース設計「ミュラー邸」のファサード立面図と断面図。外観はシンプルな白い箱。その内部にはさまざまな床レベルの部屋が立体的に組み込まれていることがわかります。

考え方に到達します。それは、二次元の平面上で居室構成を考えるのではなく、三次元の多様な「空間」ラウム」で立体的に部屋割りをする方法。プラハに30年に竣工した「ミュラー邸」はその集大成です。開所と開所の共存。室内に「舞台」と「観客席」を設け、生活空間に多様な視線高を与える立体的な「断面設計」。これに対し外観は、平屋根とキューブのシンプルなデザイン。器は合理的に、室内は豊かに。ロースは、住宅を「内部空間」で捉えた最初の建築家でした。その精神は、今日の「FREX RESIDENCE 成城モデル」に受け継がれているのです。

生活空間を立体的に考えた建築家がありました。



Adolf Loos

アドルフ・ロース 1870年ブルノ生まれ。オーストリアの建築家、評論家。「裝飾は犯罪」と唱え、合理的な近代建築の基礎を築いたモダニズムのバイオニア。

アメリカの新聞社で美術評論を執筆し、世紀末ウィーンで近代建築思想の先駆となったアドルフ・ロース。挑発的なタイトルの著書『裝飾と犯罪』で知られ、その批判精神は、近代主義の頑強な土台となり20世紀初頭のモダニズム建築を支えました。

19世紀末、工業化で富を得た中産階級の興隆で貴族は衰亡し、豪華さを競う宮廷文化に替わる都市文化が市民社会に芽生えます。今日の「住宅」が誕生したこの時代。職住分離の社会には、生活に純化した独立住宅という新たな建築ジャンルが生まれたのです。勤労者と市民の住宅には、かつて建築の格式を担保していた裝飾や様式は排され、工業化社会の合理精神が宿っていました。気鋭の近代建築家は「この独立住宅の原型を構築し、ライトは「ブレイリーハウス」を、ル・コルビュジエは「ドミノ」を創案します。

一方、ロースは1920年代半ば「ラウムプラン」という住宅の